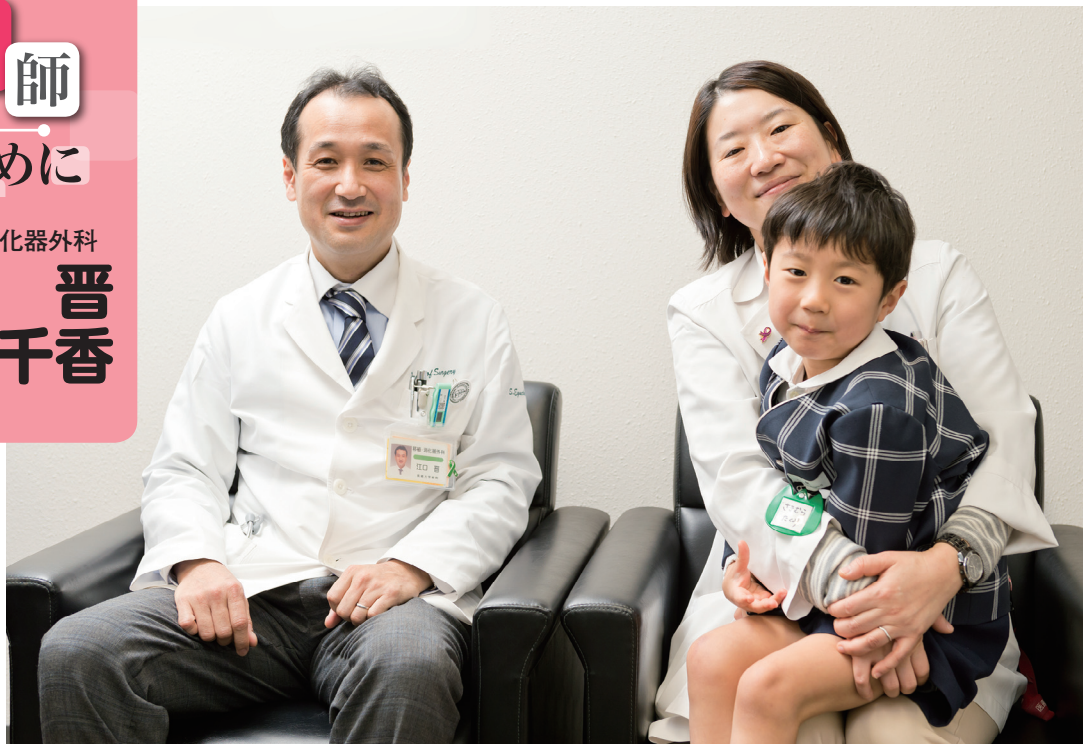
キラキラ輝く女性医師のために

第16回

いきいき活躍し続けるための
キャリアマネジメント＆ライフサポート

長崎大学大学院移植・消化器外科
江口 晋
崎村千香



左：江口 晋 教授、右：崎村千香医師と医局に来ていた息子の卓未君

外科医としてのキャリアを断念させないために

女性の進路としては、これまでハードルが高いイメージがあった外科。今回は女性外科医の現状とその支援について江口 晋 教授にお話を伺いました。

機会は平等に

私は「機会は平等」というポリシーをもっています。ですから、女性というだけで最初から分けて考えることはしません。そうしないと、モチベーションが上がらないですよね。しかし一方で、やはり結婚や出産・育児で現場を離れなければならない時期があり女性医師たちを悩ませております。当教室では、先代教授の兼松隆之医師の時代からこうした問題のサポートに力を入れてきましたが、私自身も就任以来、女性医師の働きやすさを向上させるための取り組みを進めてきました。その甲斐あってか、当教室には、ほぼ毎年コンスタントに女性が入局してくるようになり、今では合計で21名と多くの女性医師が同門で活躍しています。

女性外科医の現状

当教室の崎村千香医師が、全国の外科系大学教室に対して行ったアンケートによると、近年、女性外科医の比率が徐々に増えてきていることがわかりました（**図**）。乳腺内分泌外科に関しては、元々女性医師が多かったのですが、それ以外の消化器外科、小児外科、心臓血管外科など比較的長時間の手術が行われ、ハードといわれているような領域を選ぶ女性医師も増えはじめているようです。

これは、今までは力の強さや背の高さ

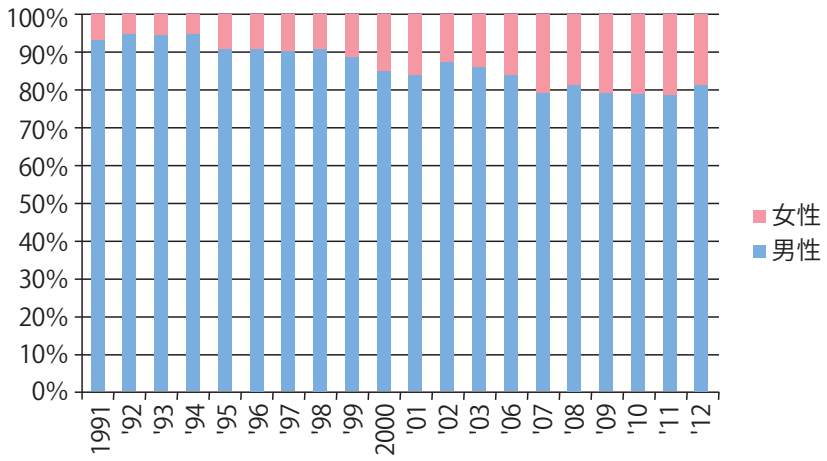


図 全国大学病院外科系教室の入局者数の変動
崎村千香，江口晋，伊東昌子：日外会誌，115：44-49，2014より引用

が必要で、男性に向いていると考えられていた手術が、最近の手術技術やテクノロジーの進歩によって女性でも十分対応できるものになってきたことが関係していると思います。特に消化器領域では、鏡視下手術、低侵襲手術の導入で、男性との筋力の差が大きなハンデにならない時代になりました。こうしたことから女性でも「外科を一生の仕事としてやりがいをもって続けていける」と感じることができる時代になってきたのだと思います。

また、受け入れ側の意識が変わってきたことも増加の要因に挙げられると思います。今は医学部を卒業する学生の約３～４割は女性ですので、一昔前のように「女人禁制」ではないですが、最初から門戸を閉ざしてしまうと、元々少ない志望者を、さらに減らしてしまうことになります。それに「本当はやりたいのに入れてもらえなかった」という学生も出てきてしまうことになります。また、われわれ指導者側としても、伝えるべき技術や、命を直接その手に感じながら治療をするという外科医の楽しさ、プライドを伝える機会を自ら減らしてしまうことにもなります。こうしたことから、女性にとって外科は難しいという風潮・雰囲気が全くなくなってきたと感じますね。

■ 撮影／石川　卓

このように入り口は整備されてきたのですが、今後は、どうやって続けていってもらうかが課題であり、当教室でもこの問題に積極的に取り組んでいます。

時間的な問題は受け入れる

当教室では朝7時半頃からカンファレンスや抄読会、回診を行っています。しかし小さい子どもがいる女性医師は保育園に預けてから出勤しなければならないため間に合いません。それに帰りも迎えにいくために早くに仕事を終えなければなりません。これを「みんなと同じように絶対に7時半に来なさい。夕方からの緊急手術にも入りなさい」としてしまうと、その組織では続けられないですよね。でも、これはそこまで大きいことではありませんし、やはり子どもには母親がそばにいないといけない時期がありますから、時間的な問題はなるべく受け入れ、代わりに勤務中は100％一生懸命働いてもらうことにしています。

男性医師の意識を改革

実は、ここで一番ポイントなのは、朝から働いている男性医師達がどう感じるかなんです。「いつも遅れて来て」とか「仕事をしないで早く帰って」と考えるようになってしまうと、たとえ直接は言わなくても雰囲気で伝わりますから、女性医師は引け目を感じてしまい、結局辞めていってしまうんですよね。ですから男性医師には「お互いさまだから、そういうことを考えてはいけない」と言っています。

男性医師でも病気になったらみんなでサポートするわけでしょう。それに男性医師に子どもがいる場合、誰が見ているのかといえば、彼らの代わりに奥さんや他の誰かが見ているということも忘れてはいけません。ですから、なるべくみんなでカバーし合って、女性医師がキャリアを続けていけるようにしよう、という雰囲気を作っていくことが大切です。このためにはリーダーが言い続けるしかありません。ずっと言い続けることで、みんなの考え方が変化していくのだと思います。

キャリアを断念させない

外科医として「手術室で働けるのが30年くらい」と考えたとき、出産から育児が一段落するまでの５年程度の休業というのは、さほど重大なロスではありません。それなのに周りの目を気にしてしまい、優秀でモチベーションが高く技術もある女性医師が、キャリアを断念するのはもったいないですよね。

私達がこうした取り組みを始めてから６年程が経ち、一度休職してから復職してくる女性医師も増えてきました。今後、消化器外科、それもいわゆるハードな肝臓移植などをやりたいと言っていた女性医師が、復職してきた後も希望通りの仕事を続けていけるようになったときに初めて、われわれの取り組みの本当の成果が確認できるのではないかと思います。

長崎大学での取り組み

長崎大学としてもさまざまな対策を行っており、その一環として今年から女性教員30％をめざした取り組みを開始しています。これに伴い、当教室でも新たに２名の女性教員を増やしました。

特に大学病院の医師にとって本当の意味のキャリアとは、いろいろな領域で指導者（リーダー）になっていくという道だと思います。ですから、やはり女性でも、将来的に教育や研究・管理でのキャリア・アップのチャンスも得られるようにしていくことが大切なのです。もちろん手術など臨床の現場はやりがいがあって楽しいですが、それだけだといつか壁にぶつかると思いますから。

外科をめざす女性医師へ

自分の手を動かして、患者さんの命の近くで治療して、その喜びや悲しみを分かち合う外科医という仕事のやりがいを、もっと多くの女性医師に感じてほしいですね。女性は男性とは、また違う視点を

「働きやすさ」と「働きがい」を感じることができる環境づくりをめざして

崎村千香医師は、育児中の身でありながら外科医としての活動のほかに女性医師支援にも積極的に取り組んでいます。長崎大学病院としての取り組みと合わせて実際の活動を伺いました。

長崎大学病院メディカル・ワークライフバランスセンターの取り組み

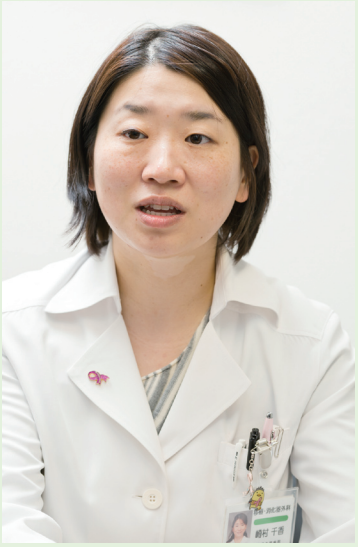
2012年に長崎県の委託を受け、伊東昌子センター長が中心となり、長崎大学病院にメディカル・ワークライフバランスセンター（以下mWLBセンター）が開設されました〔※関連記事：本連載第5回（No.42，p.15-17）〕。

mWLBセンターでは、男性・女性を問わず、仕事と生活の両立を図りながら活躍する県内の医師を応援する「あじさいプロジェクト」を推進しています。その活動の一環として、県医師会と共同で「長崎県医師会保育サポートシステム」を設置し、本年度より長崎大学病院をモデルケースとして運営を開始しました。

mWLBセンターにコーディネーターを配置し、コーディネーターが各個人のニーズに沿った保育サポーターの情報提供・紹介を行い、迅速かつ細かい要望にも対応することで、子育て中の医師の負担を減らすことを目的としています。この取り組みにより安心して就労継続でき、少しでも医師不足の解消につなげることで、長崎県の医療に貢献できると期待されています。

アンケート調査を通じた女性医師支援への取り組み

私自身の活動としては、ワークライフバランス推進員として活動し、またmWLBセンターと連携して、実際に現場の医師がどういったことに困っているかについて、主にアンケートによる調査を行っています。



過去の文献によると、女子学生は外科に対して「大変だ」「きつい」「手術が長い」というイメージをもっており、避ける傾向があるというデータが出ていました。そこで、まずは実際に今働いている先生方が専門を選ぶにあたって何を根拠にされたのかを知るための調査を行い、同時に院内の女性医師に対して、どのようなことに困難を感じているのかを調べるアンケート調査を行いました。

後者のアンケートは、「出産・育児」「パートナーの理解」「勤務状況」「その他」という4つの設問から1番困難と感じるものを1つ選択する形で行いました。事前の予想通り「出産・育児」を選ぶ方が1番多かったのですが、続いて3～4割と非常に多くの方が「パートナーの理解」を選ばれたのです。つまり、パートナーの理解が得られないために、自分の希望通りに働けないという状況が生じており、われわれが思っている以上にパートナー側の理解が重要だということがはっきりとしたのです。

出産・育児は目に見えるものですので、比較的サポートしやすいのですが、パートナーの理解は、自分の努力や職場環境の整備だけでは解決が困難であり、もっと大きなレベルでのサポートが必要となってくると思います。

今後は、その解決策を探ることも目的に、女性医師のみならず男性医師も含めて、さらに踏み込んだ調査を行っていきたいと考えています。

もっていますので、その意見にはっとさせられることがよくあります。それに、乳腺内分泌領域など女性特有の疾患は、同性の方が共感しやすいでしょうし、女性の直腸・肛門疾患などは、やはり女性医師が診た方が患者さんは安心でしょう。

近年では女性でも外科医としてキャリアを積むのが難しいことではなくなってきました。全国的にも女性外科医支援の取り組みは広がっていますから、ぜひキャリアを重ねて指導者になってもらって、ゆくゆくは自分が若い人を育てるところまでめざしてほしいですね。

外科をめざす男性医師へ

今の研修医諸君は、学生の頃から女性が多くいるなかで育っていると思いますが、外科の世界も同様に徐々に女性が増えていくと思います。同僚が出産や育児の時期を迎えたときには、お互い様の気持ちでサポートして、外科医としてお互いに切磋琢磨し、高いレベルをめざしていってほしいと思います。

Profile

江口　晋（えぐち　すすむ）
長崎大学大学院移植・消化器外科教授
長崎大学病院副病院長（研究・先端医療担当）
専門領域：消化器一般外科、肝移植、肝胆膵外科
趣味：野球、ジョギング、外国語（英語流暢、オランダ語そこそこ、ロシア語練習中）

崎村千香（さきむら　ちか）
長崎大学大学院移植・消化器外科
長崎大学病院臨床研究センター助教
鳥取県境港市出身。2004年鳥取大学卒業、卒後研修後に鳥取大学第一外科入局。
結婚を機に2008年当教室入局、現在にいたる。
専門領域：一般外科、乳腺・内分泌外科